

東アジアの視点で 戦後80年を考える

伝えたい

戦後80年
過去から
未来へ

伊那で平和祈念集会 大日方早大名誉教授講演



日中韓3国共
を手に他者認
訴える大日方

力を克服して国際観を作る」と語り、自国主義や排外主義に警鐘を鳴らした。

大日方さんは1950年生まれ。2002年に日中韓3国の研究者や教育者と歴史教材作りを始め、05年に「未来をひらく歴史」を3国で同時刊行。その後も編さん作業のまとめ役を担い、12年には「新しい東アジアの近現代史（上・下）」を発表した。今年9月には3冊目となる「新・未来をひらく歴史」を出版予定という。

講演では、高校の歴史総合向けに編集した最新刊を紹介しながら、東アジアの戦後を解説した。第3部1章1節の「8月15日は何の日か」では、日本には敗戦、中国や連

合国は勝利、朝鮮や台湾には日本の植民地支配から解放された日であることを記載し、「他の国の国民として生まれ、何を感じたか」を問い掛けた。

大日方さんは、共通教材作りを「国を開き、未来を開くための取り組み」と語り、「連帯、対話、交流で信頼関係を

作っていくことが、戦争と力を克服して国際観を作っていく。溝ではなく橋、分断ではなく絆を作るべきだ」と強調した。その上で「自分を豊かにするためにこそ相手を知る。独りよがりになると自分が分からなくなり、未来が見えなくなる。この教材を使いながら対話と交流をしてほしい」と願った。

集会は上伊那地域で平和運動に取り組む30団体で構成する「平和のための上伊那戦争実行委員会」が主催し、約150人が聴講した。宮下与兵衛委員長は「過去に目を閉ざす独裁者が戦争を続けていく」と語気を強め、若者の平和運動に期待を寄せた。

（唐沢宏）

日中韓共通の歴史教材作りに取り組む早稲田大学名誉教授の大日方純夫さん（須坂市出身）が16日、伊那市で開いた戦後80年平和祈念集会で「戦争の過去を平和の未来へ、東アジアの視点で考える戦後80年」と題して講演した。相手の視点と立場で歴史を認識し、対話と交流で信頼関係を築いていくことが「戦争と